

井上（2009）のモーダル研究の意義： カートグラフィーの視点から*

遠藤 喜雄

要旨

本稿では、井上（2009）におけるモーダル研究の意義をカートグラフィーの点から再評価する。まず、カートグラフィーの基本的な思考法を紹介し、それを踏まえて、井上（2009）のモーダル研究が、カートグラフィー研究を推進する上で非常に有益であることを見る。

キーワード：カートグラフィー、モーダル、真性、擬似

1. 序

本稿では、井上（2009）におけるモーダル研究の意義を再評価する。結論を先取りすると、井上のモーダル研究は、カートグラフィー研究を推進するに当たり、非常に示唆に富み有益であることを見る。本稿は次のように構成されている。まず、第2節でカートグラフィー研究の基本的な思考法を紹介する。次に、これを踏まえて、第3節で、井上（2009）において論じられているモーダルの諸特性がカートグラフィー研究を推進する上で非常に有益であることを見る。最後に、第4節で全体をまとめる。

2. カートグラフィー研究の思考法と研究方法

本稿でカートグラフィー研究と呼ぶのは、正式にはthe cartography of syntactic structuresで、Luigi RizziとGuglielmo Cinqueが共同で始めたヨーロッパ生まれの研究プログラムである。その目的は、文の構造を地図(cartography)のように詳細に提示するところにある。しかし、カートグラフィーの先行研究を見渡してみると、単に文の構造を細かく提示する以上に、そこには、ある一定の方向性が見られる。その方向性は、次の3つのタイプにまとめることができる。

- (1) a. 先行研究で想定されている範疇を、2つ（以上）に分離（split）する。
- b. 先行研究で想定されている範疇の配列を、体系的に階層構造で表現する。
- c. 先行研究で想定されている範疇の配列を、一般的な原則から導き出す。

まず、(1a) について、トピック表現を中心に見よう。Chomsky (1977:92) は、主に英語の事実をもとに、トピック表現が生じる統語的位置（Top）が主文に一つあるとした（cf. Chomsky 1977: 92）。この考えは、 $S'' \rightarrow \text{TOP } S'$ という句構造規則により表現されている。それに対して、Rizzi (1997) は、(2) に見るイタリア語の事実をもとに、実は、トピック表現の占める位置（Top）がCP領域において複数箇所に分離（split）され、フォーカス表現の（Foc）の前後に位置するとの提案をした。また、Rizzi は、英語とは異なり、イタリア語では、トピック表現が同時に連続して複数個生じることが可能であることをTop*という表記を用いて示した。

- (2) Credo che a Gianni, QUESTO, domain, gli dovremmo dire
- C Top* Foc Top* IP

以上をまとめると、(1a) の思考法を用いて、英語の1つのトピック表現の統語的な位置がイタリア語の観点から複数に分離するという提案がなされた。

この(1a) の思考法を英語に適用した試みとして、理由を問う表現の研究がある。そこでは、Shlosnky and Soare (2011) により、whyが否定の島に抵触しないことを根拠に（=3a）、whyが基底で否定（Neg）表現より高い統語的な位置にReasonPという投射内で基底成されることが示された。それに対して、Endo (2015) は、理由を問う別の表現であるwhat-forが否定の島に抵触する事実をもとに（=3b）、否定よりも低い位置に別のReasonPがあることが提案した。ここでは、ReasonPという範疇がCP領域において2箇所に分離される(1a) のパターンが英語で提案されている（=3c）。

- (3) a. Why didn't Geraldine fix her bike?
- b. *What didn't you come to the United States for?
- c. ... [ReasonP why... [NegP not... [ReasonP what for...

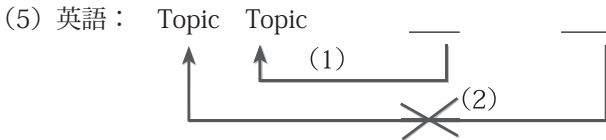
次に、(1b) の思考法を副詞表現 (adverbial expression) に焦点を当てて考察しよう。Cinque (1999) は、副詞表現が一文中に連続して複数生じる場合に、その配列順序を副詞表現の意味と主要部に生じる形態素を重ね合わせながら、副詞表現が連続して階層構造を持つことを体系的に示した。ここでは、(1a) においてあるタイプの範疇が異なる範疇をまたいで分離されたのに対して、(1b) においては、あるタイプの範疇を連続的に分離する手法が採用されている。この手法は、局所的簡素化 (local simplicity) の性質がみられる場合に採用される。局所的簡素化とは、1つの統語的位置に1つの特性を付与するという考えで、例えば、(4) においては、ムードという1つのタイプの範疇が、speech-act, evaluativeなどの複数の特性を同時に表すことがなく、speech-act という特性を持つムード表現と、別の evaluative という特性を持つムード表現が異なる投射で階層的に配列されている。英語の場合、分離されたそれぞれの投射の主要部は音声化されることはないが、他言語では実現されることがあるので、副詞表現が指定部という主要部とは異なる位置に生成される。(主要部と指定部が同時に両方埋められる言語としては、Gunbeなどがある。)

- (4) [*frankly* Mood_{speechact} [*fortunately* Mood_{evaluative} [*allegedly* Mood_{evidential} [*probably* Mod_{epistemic}...

ここに見るムード表現の階層性は、普遍的なものと想定されており、他言語でも成立すると考えられている。例えば、Endo (2007, 2012) では、主要部後置型の言語 (head-final language) である日本語において、終助詞というムード表現が、テンスの後ろの位置で (4) と鏡像関係 (mirror image) で連続的に配列されることが示されている。

最後に、(1c) のパターンを見よう。英語では、トピック表現が1文中に1つしか生じないことを上で見たが、Rizzi (2004) は、これを局所性の原理 (locality principle) から導き出した。具体的には、Chomsky (1977) が、文頭に生じるトピック表現が島の制約に従う事実を根拠に、英語のトピック表現が移動により生成されることを示したのを受けて、Rizziは、英語とは異なりイタリア語においてトピック表現が複数生じるという両言語の違いを以下のように説明した。まず、トピック表現が文頭に位置に複数生じるためには、(5) に見るように、

最初に移動されたトピック表現が、別のトピック表現を飛びこすことが必要になるが¹、この派生は、あるタイプの表現が同じタイプの表現を飛びこすことを禁ずる局所性の原理（正確には、relativized minimality, cf. Rizzi 2004）に抵触する。そのため、英語においては、2つのトピック表現が1文中に多重に生じることはない。一方、イタリア語においては、英語とは異なり、文頭に生じるトピック表現が島の制約に従わないことを根拠に、Rizziは、イタリア語のトピック表現の派生に移動は関与せず、基底生成される（base-generation）とした。イタリア語において基底で生成されたトピック表現は、他のトピック表現を移動により飛びこすことがないので、局所性の原理に違反することなく1文中に多重に生じることが可能となる。（英語やイタリア語とは幾分異なる振る舞いをする日本語のトピック表現の派生については、Endo（2007）を参照。また、その他の英語におけるバリエーションを導く試みの一つとしては、Endo（forthcoming）を参照。）



以上、カートグラフィー研究の思考方法に見る3つのパターンを簡単に述べた。この点を念頭において、次節において、井上（2009）のモーダル研究の意義をカートグラフィーの点から再評価する。

3. 井上（2009）のモーダル研究

井上（2009）は、日本語のモーダル表現に2種類あることに着目する。（この2分法についての日本語学における詳細な研究としては、仁田（1987, 2013）がある。）第1のタイプのモーダルは、真性モーダルと呼ばれ、もう一つのタイプのモーダルは、擬似モーダルと呼ばれる。その詳細な議論は、井上（2009）に論じられているので、ここでは、カートグラフィーに関わる側面だけを取り上げる。井上は、真性モーダルは、(6)に見るように1つの文に1つしか生じないのに対して、擬似モーダルは、(7)に見るように1つの文に複数生じることが可能であるという特質を持つ点を述べている。また、井上

（2009:119-120）は、これらのモーダルがCPの領域に生じるとの示唆もしている。

（6） a. *この山に登ろう まい。（まい＝意思）（認識＋認識）

 b. *あすは、大学に行こう な。（な＝禁止）（認識＋発話伝達）

（井上2009: 116）

（7） a. 誰かが戸をあけておいたようなのです。

 b. 今日は社長が出てくるはずなんだろう。

（井上2009: 117）

井上のモーダルについての考えとデータは、カートグラフィー研究の今後の展開に、いくつかの点で重要な示唆を与える。第1に、Rizzi（1997:284）は、モーダル要素は基本的にIP領域に生じるとしながらも、言語間に見られるバリエーションとして、ポーランド語などのモーダル要素がCP領域にも生じるという事実をもとに、IP領域の要素がCP領域にも生じることを可能にするメカニズム（replication）があるとしている。（日本語と英語のバリエーションについては、Endo and Haegeman（2014）を参照）日本語では、モーダルがテンスの左にも生じる（例えば、雨が降り-そう-だ）ことから、IP領域に生じるモーダル形式を持つ一方で、（7）で見たように、テンスの右にもモーダル形式が生じることからCP領域に生じるモーダル形式も併せ持つ。ここから、Rizziが述べる、IP領域の要素をCP領域に生じることを可能にするメカニズムが日本語にも働いていることがわかる。ここで重要なのは、日本語では、テンスの左に生じるモーダル形式よりも、テンスの右に生じる井上の議論するモーダルの方が豊富であり、井上の研究を糸口にしてIPの要素をCPの領域に生じることを可能にしているメカニズムの性質が今後は日本語のデータをもとに解明されることが期待される。

第2に、井上が述べる日本語における複数のモーダルが連続して生じるという性質をみよう。この事実は、前節で見た（1b）のパタンである。ここで、前節で述べたトピック表現が重複して生じるメカニズムを思い出そう。同じタイプの範疇が連続して生じるためには、局所性の性質により、その連続して生じる要素は移動ではなく基底生成される必要がある。つまり、（7）のモーダルは基底で生成されることにより派生される。ところが、Endo（2007, 2012）

においては、テンスの右に生じる終助詞のモーダル要素はCP領域に基底生成されるのではなく、IP領域からCP領域に移動することにより派生されることが示されている。すると、日本語のモーダル形式には、移動に関わるタイプと基底生成に関わるタイプの2種類が同時に混在していることがわかる。これは、類型論的にはめずらしいく、井上のモーダル要素の研究から、カートグラフィーの類型論の分野においてもこの分野で大きな貢献が期待される。

最後に、井上（2009:120）は、モーダルの生じる位置が、CP領域内であるとして、次の構造を提示している。（下線は筆者による）

(8) ForceP ModP1 TopP* Int TopP* FocP ModIP* ModI2 TopP* FinP

残念ながら、井上は、問題のモーダル要素（Modl 1, Modl 2）がフォーカス表現（FocP）とTopP*の間に生じる根拠を全く提示していない。この点を実際のデータを元に検証できれば、カートグラフィー研究においてモーダルの統語的位置を解明するための非常に重要な貢献がなされることが期待される。

5. まとめ

以上、本稿では、井上（2009）のモーダル研究の意義をカートグラフィー研究に焦点を当てて再評価した。そこでは、井上のモーダル研究は、カートグラフィーの視点から眺めることで、今後のカートグラフィー研究に大きな貢献をする可能性が多くあることを述べた。また、井上が検証せずに示唆しているモーダルの統語的な位置についての考えもこれからの研究においてもその検証が待たれ、井上のモーダル研究が、日本のみならず海外の理論及び実証的な研究においても非常に大きな波及効果を持つ可能性を秘めていると考えられる。

注

* 本稿を2017年5月3日に昇天された神田外語大学元学長の井上和子先生に捧げる。井上先生からは、日本語のモーダルについて、多くのことを学ばせていただいた。ここに、感謝の意を表したい。尚、本稿は2017年5月21日に静岡大学で開催された日本英文学会のシンポジウムにおいて発表した論文の序章の1部分に大幅な修正を施したものである。そこでは、

次の聴衆の方々から、多くの有益なコメントをいただいたことに感謝の意を表したい：赤楚治之、縄田裕幸、前田雅子、保坂道雄、田中智之。また、本研究をまとめる過程においては、Liliane Haegeman, Richard Larson, Andrew Radford, Luigi Rizzi, Ur Shlonskyからも多くのことを教えていただいたことに感謝したい。最後に、本研究は、日本学術振興会 科学研究補助金（基盤研究（C）（領域番号：16K02639）『モダリティと視点に関わる言語現象と統語構造の多層性』（研究代表者：遠藤喜雄）の補助を受けてなされている。

¹ トピック表現が別のトピック表現を飛び越さない派生は、非循環的（counter-cyclic）な派生になるため非合法的となるので、採用されない。

参考文献

- Chomsky, Noam (1977) On wh-movement. In *Formal syntax*, ed. by Peter Culicover, Tom. Wasow, and Adrian Akmajian, 71?132. New York: Academic Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads. A cross-linguistics perspectives*. New York: Oxford University Press.
- Endo, Yoshio (2007) *Locality and information structure*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Endo, Yoshio (2012) Illocutionary force and discourse particle in the syntax of Japanese, *Modality and theory of mind elements across languages*, ed. by Werner Abraham and Elisabeth Leiss, 405-424, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Endo, Yoshio (2015) Two ReasonPs. In *Beyond functional sequence*. ed. by Ur Shlonsky. 220-231. New York: Oxford University Press.
- Endo, Yoshio (forthcoming) Inter-speaker variation and subject drop in *how come* questions in English. To appear in *Linguistic Variation* [Special issues on Complementizers: Lexical vs. functional variation].
- Endo, Yoshio and Liliane Haegeman (2014) Adverbial concord merging adverbial clauses. *MIT Working Papers in Linguistics* #73, Cambridge, Mass. To appear in *Glossa* [Special issues on the internal and external syntax of adverbial clauses; theoretical implications and consequences] as Haegeman and Endo.
- 井上 和子 (2009) 『生成文法と日本語研究』 東京：大修館書店.
- 仁田義雄 (1987) 『日本語のモダリティと命題』 東京：ひつじ書房.

- 仁田義雄（2013）「モダリティ的表現をめくって」遠藤喜雄（編）『世界に向けた日本語研究』
pp. 135-162. 東京：開拓社.
- Rizzi, Luigi（1997）The fine structure of the left periphery. In *Elements of grammar: Handbook of generative syntax*, ed. by Lilliane Haegeman, 281-337. Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi, Luigi（2004）Locality and left periphery. In *Structures and Beyond. The cartography of syntactic structures, vol.3*, ed. by Adriana Belletti New York: Oxford University Press.
- Rizzi, Luigi（2013）Notes on cartography and further explanation', *Probus* 25: 197-226.
- Shlonsky, Ura and Gabriela Soare（2011）Where's 'why'? *Linguistic Inquiry* 42, 651-669.